

そしてバックハグした先輩は、私の首筋に唇をつけた。

チュツ。

写真を確認する。

「どうでしょう？」

「だいぶ良い！」

「やっぱり距離とかの問題ですね」

「実際にすると、リアル感が出るんだろうね」

「そうみたいです」

「おもしろいね！」

「はい」

でも…だんだん先輩を意識し始めている。最初は興味があってやってたけど、心臓が高鳴って来た。

何故かそこで二人は黙り込む。

もしかしたら…先輩も同じこと考えているのだろうか？

先輩は、ハッと気を取り直したような顔で言う。

「じゃ、じゃあ次はどんなポーズを撮るか？」

「でも」

「いいよ。俺もだんだん楽しくなってきたし、恥ずかしくないでエロいポーズ撮ろうよ」

「はい。じゃあ…えっと…立ってもらっていいですか？」

「ああ」

そして私は先輩の前に膝をついて座り、顔を先輩の股間のあたりに寄せる。

「頭の後ろを押さえて、ぐっと股間に顔を押し付けてください」

「ごうか？」

「ちよっとそのまま立っててくださいね」

そしてスマホをセットし元の位置へと戻る。股間の前に顔をやると先輩がさっきと同じように、グッと私の頭をひいて股間に押し付けた。

パシヤ！ パシヤ！ パシヤ！

撮れた画像を先輩にも見ってもらう。

「なってる。唾えているように…てか、これひよっとしてイマラチオ？」

「はい」

「エロいな…」

「次もいいですか？」

「ああどんどんやろう」

先輩に、ベッドの横に立て膝で立つようお願いします。

「そのままです」

私は夢中でベッドの上の洗濯物を端に寄せて、そこに仰向けに寝っ転がり頭を縁から下におろして、先輩の股間に顔を向けるようにする。顔は逆さまになっており、頭が下で正面には先輩の股間がある。

スマホをセッティングして言う。

「私の顔に股間をうずめるようにしてください」

「こうか」

「んん」

。パシヤ！ パシヤ！ パシヤ！

そして、その画像を二人で見る。

「すっご。喉の奥に入ってるみたいなポーズ」

「こう言う画像はなかなか無くて」

「確かにあんまり見た事無いな…」

夢中になって撮影をしているうちに、いつの間にか時間がたっていて車のエンジン音が聞こえて来る。

「あ、誰か帰って来ちゃったかも」

「えっ。大丈夫かな？」

「私の部屋には勝手に入ってこないから大丈夫ですよ」

「そっか」

「もつと撮影してもいいですか？」

「高崎さんが、大丈夫なら」

「問題ないです」

そして私はスマートフォンを手に取り言う。

「自撮りみたいな感じの角度にしたいんです」

「いいよ」

だが一瞬、躊躇ってしまった。これからお願いする事はちよつと一線を画す。

その表情を見て先輩が言う。

「なんでもやってみようよ。もつと大胆な事もOKだよ？」

ニツコリ笑う先輩の表情に、私のタガが外れた気がした。

「あの。舌の腹と舌の腹を密着させた画像が欲しいです」

「わかった」

そして先輩がべーって舌を出した。私はスマホでアングルを確認しつつ、舌をべーっと出して顔を近づけていく。

ねと。

先輩の舌と私の舌が密着した。

パシヤ！ パシヤ！ パシヤ！

そしてスツと離れる。先輩の舌の感触が私の舌に残っていた。暖かくてやわらかくて…変な気分になった。

写真を二人で見て先輩が言う。

「…エロいね」

「はい」

写真には上気した顔の二人が映っており、舌を密着させながらカメラを見ていた。するとその時だった。

一階からお母さんの声が聞こえて来る。

「ご飯どうするのー」

私も先輩も焦ってしまふ。

私は咄嗟にドアまで行って顔を出し、階段下のお母さんに向かって言う。

「ご飯は食べたからいらないよ」

「わかった。あんたが食べないんなら、適当に済ませようって事になったのよ」

「みんなで食べて」

「はいはい」

部屋に戻ると先輩が複雑な表情で待っていた。そしてささやくような声で言う。

「いいの？」

「良いんです…」

先輩はホツとしたような表情を浮かべつつ、いたずらっ子のような顔をしてささやく。

「ねえ。これ」

先輩の手には私の洗濯物のパンティーが握られていた。

「あっ！」

私を取り返そうとするが、先輩はスッと手を引つ込める。

「これの匂いを嗅いでいるところを、俺のスマホで撮って」

「えっ」

「お願い」

そして先輩にスマホを渡され、先輩がパンティーに顔をうずめた。

カシャ！ カシャ！ カシャ！

それを見せると先輩が言う。

「今度は…舐めてるところ」

そう言ってパンティーを広げて、股間の内側をさらけ出す。いくら洗濯物とはいえ恥ずかしかった。

「ああ：見ないでください」

「良いから撮って」

先輩は私のパンティーの股間の内側を舐めた。

カシャ！ カシャ！ カシャ！

そしてスマホを渡すと満足そうにしている。

「恥ずかしいですよ」

「お！ その表情いいね」

カシャ！

先輩は私の写真を見て嬉しそうにしていた。恥ずかしがっている私が映っている。

凄くエロかった。その自分の表情に何か変な気分になる。

「なんかこんなことになってすみません」

「えっ？ なんで？ めっちゃ楽しいんだけど、楽しくない？」

「正直楽しいです。でもパソコンを診てもらっただけだったのに、こんなにしてもらって良いのかなって」

「いいでしょ別に。次は何を撮る？」

正直言うと、もっと過激な写真が撮りたかった。

それに密室で変な事をしているうちに、先輩との距離が急接近してしまい、もっと近づきたいと思ってしまった。

「自撮り風のデープキスの写真を」

「デープキスして…いいの？」

「はい。それとアングルが分からないので、動画で撮ってもいいですか？」

「動画ね。いいよ」

ピコン！ と私が動画のボタンを押す。

すると先輩の唇が近づいて来て、私の唇を塞いだ。私は片手で自分達の顔が重なるところを動画で撮り、先輩は無心に私に舌を絡ませて来る。それは三分くらい続き、うっとりしながら離れて撮影を止める。

「動画…見ます？」

「見よ…」

二人はスマホの画面で激しくデープキスする動画を、息を殺して見るのだった。